

研究報告

さまざまな困難を抱えた学生に対する支援の現状と対応の工夫についての考察 ～北翔大学教職員アンケート調査の結果から～

飯田 昭人¹⁾ 新川 貴紀¹⁾ 川崎 直樹¹⁾ 斉藤 美香²⁾

1) 北翔大学 人間福祉学部 福祉心理学科 2) 北海道大学 保健センター・元北翔大学学生相談室

抄 録

本研究は、2009年3月12日に本学で開催された「多様な学生を支援するための勉強会」のために、事前に本学の教職員にアンケート調査を実施したものの分析結果である。

本研究の結果から、本学の教職員の全てが「個人に合わせた配慮や支援の必要性がある学生」について、「いる」と回答し、実際にさまざまな状況において、対応に苦慮していることが明らかとなった。特に、多くの学生の背景には、対人コミュニケーション能力に乏しいことが示唆され、学生一人ひとりに応じた配慮や支援の必要性が喫緊の課題であるといえる。

また、教職員も学生に働きかける（配慮する、支援する）という視点だけではなく、自らも学生とともに学び成長し、信頼されるよう努力する姿勢が求められると思われる。さまざまな困難等を抱えた学生があらゆる意味で変わっていくためには、「この大学に入ってよかった」「この教職員や友人がいたから、自分も変わることができた」と思ってもらえることが大切であろう。教職員は自分自身の指導や対応を常に振り返り、個への配慮と集団への関わりについてバランスよく考えていくことが求められるといえよう。

キーワード：困難を抱えた学生、支援の現状、教職員の対応の工夫

I. 問題の背景と目的

少子化現象にあいまって、大学全入時代が到来しつつあり、入学者集団の裾野が広がっている。いわゆる大学の大量化により、以前とは様相を異にする多様で深刻な問題や悩み、障害などを抱えた学生の入学が増加していることは、多くの大学における学生相談室などの現状などからも明らかである（日本学生相談学会50周年記念誌編集委員会編2010）¹⁾。

現在では、特に発達障害について注目されており、発達障害の診断を受けている学生やその疑いのある学生に対して、大学にはきめ細やかな配慮が求められているといえよう（斎藤他2010）²⁾

大学側の視点に立つと、障害に限らず、さまざまな問題や悩みを抱えている学生に対して、求められる多様な支援を考えていく必要がある。学生相談室の充実はもちろん、修学支援にも力を入れ、多様な学生の支援方策について教職員が一丸となって取り組んでいくことが求められる（独立行政法人日本学生支援機構2008）³⁾。

一方で、学生の視点で考えると、例えば、いじめや不

登校経験を有する者、発達障害や精神障害の診断を受けているか、もしくはその疑いのある者、非行歴のある者などが、自律的に判断して大学生活を営んでいくには多くの不安が伴うであろう。実際に内田（2003）⁴⁾の調査でも、大学の中退や退学などの割合が年々増加しており、大学に適應できない学生は、今後ますます増えていくことが予想される。

当然のことであるが、一つとして同じ大学は存在せず、それぞれの大学は、理念や教育観、規模や立地条件、学生の状態像など、皆異なるものである。したがって、大学では、その学生の資質や能力を見極め、そして何に困っているのか、どういうことが問題であるのかを把握し、教職員が互いに協力し、今必要とされる対応を行っていくことが重要であろう。個々の大学で学生支援を行っていくために、教職員は日々学生と接していて、どのようなことを考えているのか、学生対応や学生支援にどのような配慮や工夫をしているのか、を明らかにすることには大きな意義があると思われる。

本研究は、2009年3月12日に、北翔大学で開催された「多様な学生を支援するための勉強会」において、議論の材料とするために、事前に教職員対象に行ったアン

ケート調査の結果を分析・検討したものである。

本学の教職員の視点から、さまざまな困難を抱えた学生の現状と、そのような学生への教職員の対応を整理し、今後の大学教育に求められる支援の在り方を考えることを目的とする。

Ⅱ. 研究の方法

2009年2月に北翔大学の教職員に対し、本執筆者である飯田・新川・川崎の3名で作成したアンケート調査を行った(文末資料参照)。そのうち、61名(男性33名、女性27名、不明1名)から回答を得た(図1参照)。61名中45名が教員であり、15名が事務職員、不明が1名であった(図2参照)。年齢(図3参照)と勤務年数(図4参照)に関しても概ね偏りは見られなかった。

アンケートは2部構成となっており、「質問1」と「質問2」とに大別される。質問1では、北翔大学学生の全体的印象について、質問2ではこれまでに対応に苦慮した個別の事例についての回答を求めた。質問内容の詳細については、Ⅲ. 結果と考察に記述する。

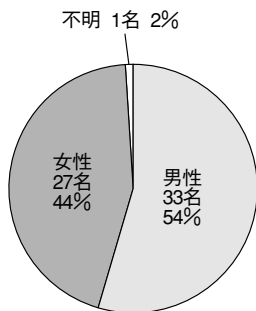


図1 対象者の内訳

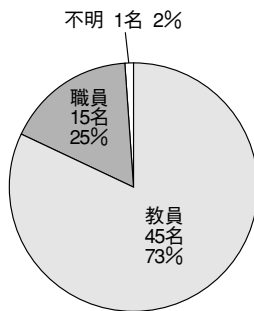


図2 職種について

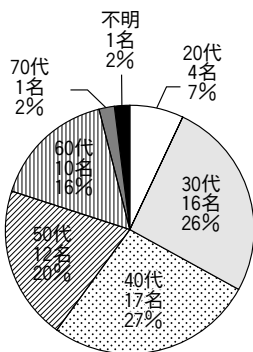


図3 年齢について

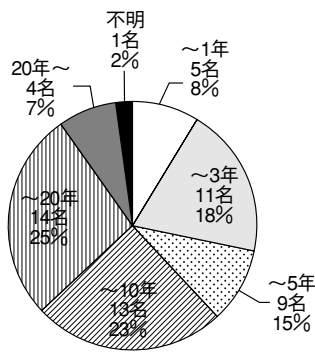


図4 大学勤務年数について

Ⅲ. 結果と考察

1. 質問1：本学学生に対する全体的印象について

最初に「個人に合わせた配慮や支援の必要性がある学生」が、どのくらい多くいるかという質問項目で、「いない」から「非常によくいる」までの4段階評定で回答を求めた。その結果、図5に示したように「いない」との回答が0%であり、「まれにいる」を含め、配慮や支援の必要性がある学生についてはほとんどの教職員が存在を認識していることが明らかとなった。特に、「非常によくいる」「よくいる」を合わせると、全体の40%以上になる。大学全入時代が到来し、本学においては、多様な背景を抱える学生が増加しており、全体を見据えた対応や支援だけでなく、一人ひとりの個に応じた配慮や支援が必要であると、教職員が感じていることが示唆された。

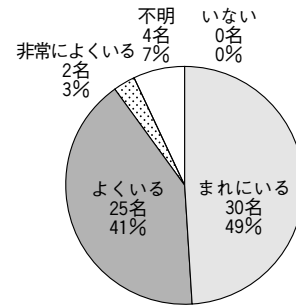


図5 要支援学生の多さ

続いて、配慮や支援の必要な学生の、講義やゼミの理解について、選択肢を提示し、教員のみにも回答を求めた。その結果は、図6に示すようなものとなった。

項目4の「課題の提出期限が守れない」と項目6の「聞く人、読む人がわかりやすいように考えを整理して話したり、文章にしたりすることができない」に関しては「非常にある」と「よくある」の合計が50%を超えるという結果となった。

項目4「課題の提出期限が守れない」については、

	■ ない	□ まれにある	□ よくある	■ 非常にある
1. 通常の進め方では講義等についていけない。	11	53	33	2
2. 自分でノートが取るができない。	11	51	31	7
3. 一生懸命学業に取り組んでいる様子であるが成果があがらない。	11	56	29	4
4. 課題の提出期限が守れない。	0	46	46	9
5. 授業中、突然に的はずれな質問や奇妙な行動をとってしまう	50	41	7	2
6. 聞く人、読む人がわかりやすいように考えを整理して話したり、文章にしたりすることができない。	9	23	45	23

図6 教員から見た講義やゼミの理解について (%)

「教員の話をしっかり聞いていないので提出期限が守れない」「提出期限を守るという意識が希薄」といったことも考えられるが、「期限までに仕上げるができない」という意味合いのほうが大きいと考えた。つまり、一部の学生は適切な用語を用い、自分の考えを文章にしてまとめるということに苦手意識を持っているものと考えた。

項目6「聞く人、読む人がわかりやすいように考えを整理して話したり、文章にしたりすることができない」についての結果からは、対人関係の希薄化がその背景にあり、コミュニケーションの形成に困難を感じている学生が一定数存在するものと考えた。

続いて、配慮や支援の必要な学生の、対人関係・情緒・進路面について、事務職員を含めたすべての協力者に回答を求めたところ、図7に示すような結果となった。項目8「敬語など、状況に即した言葉遣いができない」では、「非常にある」「よくある」の合計が50%を超えている。また、項目10の「周囲から孤立しているように見える」に関して、「非常にある」「よくある」の合計が30%を超え、「いない」と回答している教職員が0%であった。項目14の「進路に自分の能力や特性にあまりそぐわない職種を希望する」に関して、「非常にある」「よくある」の合計が30%を超えていた。

項目8「敬語など、状況に即した言葉遣いができない」からは、いわゆる最近の青年期の特徴といえなくもないであろうが、対人関係スキルがあまり形成されていないことがその背景にあるのではないかと考えた。

項目10の「周囲から孤立しているように見える」に関しては、うまく友人関係を築けない、人と関わることの苦手な学生が増えてきていると考えてよいのではないだろうか。

項目14の「進路に自分の能力や特性にあまりそぐわない職種を希望する」に関しては、学生自身が自分の身につけている知識や能力とかけ離れている理想の進路を求

めていることも一方では推察される。だが、他方では進路に対して、明確なイメージを描くことができないことも考えられよう。また、自分に自信が持てないがゆえに、希望している進路を簡単にあきらめてしまい、無難な選択を考えてしまう傾向があるのではないかと料した。

また、近年の学生の気になる点について自由記述により回答を求めた。以下の表1にその代表的なものを示す。

表1 近年の学生の気になる点についての主だった自由記述回答例

回答例1	大学の講義に出ているものの、内容の理解が追いつかず、本人もそのことを苦しく感じている。
回答例2	学費(コスト)を払ったのだから、学習の成果は与えられるものである(あまり努力をしなくても)という意識をもっている。
回答例3	自分の意思がなく、卒業後の就職先(進学も含む)について答えを求めてくる。
回答例4	自分で考えようとする意識が薄く、先生に言われた通りにしかできない。

上記の結果から言えることとして、「学力の低い学生の存在」「講義の理解が追いつかない学生」(回答例1より)、「講義に出てさえいれば、知識や技量などが身につくと考える」「積極的に自分から活動することに乏しい」(回答例2より)、「自分の意思がないようにみえる」「指示されたことしかできない」(回答例3,4より)などが、本学の学生に対する教職員のイメージであるといえよう。

これらの結果から、大学では、学生が自ら主体的に動き、考え、決断できるように、細やかな配慮や支援の必要性があるということが言えるのではないかと考えた。

2. 質問2：個別の事例について

続いて、質問2では「もっとも配慮を必要とした学生について一人を思い浮かべて」いただき、回答を求めた。その学生との関わった立場は、「ゼミ担任」としての関わりが26名と最も多く、「講義担当」が11名、「窓口対応」が5名、「その他」が10名、「不明」が9名であった。「その他」に関しては実習指導・相談業務での関わりとの記述があった。

この結果から、教員はゼミ担任としての立場や講義担当を通して、配慮を必要とする学生と関わる機会を持つことが大半であり、職員は窓口対応を通して、それらの学生と関わりを持つことが多いと思われる。

次に、「その学生の抱えていた具体的な課題や対応の難しさはどのようなものであったのか」ということについて、自由記述で回答を求めた。その結果を以下表2に

■ ない □ まれにある □ よくある ■ 非常にある

8. 敬語など、状況に即した言葉遣い ができない。	5	43	43	8
9. 友人とトラブルを起こしてしまう。	27	57	13	4
10. 周囲から孤立しているように見える。	0	68	27	5
11. 物事がうまくいかないと動揺して パニックになる。	40	48	10	2
12. 自己主張が強く、自分の意見を 変えることができない。	15	61	24	0
13. 極端に自信がなく、自分はダメな 人間だと訴えている。	21	53	22	3
14. 進路に自分の能力や特性にあまり そぐわない職種を希望する。	15	51	29	5

図7 教職員から見た対人関係・情緒・進路面に関する学生の傾向(%)

示す。

表2 学生に関する具体的な課題や対応の難しさについての主だった自由記述回答例

回答例1 文章を読ませても、あまりにも簡単な字が読めなかったり、文章を読むのがたどたどしかったりする。
 回答例2 レポートや卒論を添削しても直せない。何度注意しても同じことを繰り返す。
 回答例3 教室に入れないため、単位取得が全くできない。
 回答例4 思ったことをすぐ行動や話してしまうので友人が出来ない。
 回答例5 友人や教職員への不満をただちに解消してもらおうことを強く求めてくる。意に沿わないと家族に訴えて家族から苦情などがよく寄せられた。

表2の結果より、回答例1と回答例2からは、大学で学ぶ上での学力的側面が備わっていない学生の存在が指摘されている。いわゆる、「学び直し」の必要性のある学生が相当数いることが示唆されよう。

また、回答例3からは、メンタル面の不調である学生の存在が考えられる。学生相談室などでも相談件数は増えてきているが、メンタル面に不調を抱えた学生の中には、学生相談室の利用はおろか、ゼミ担任などにも言えない場合も少なくなく、そのような学生が自ら相談できるように、周囲が配慮していくことが大切であるといえる。

回答例4からは、学生の対人関係の形成に困難な背景が示唆される。教職員との関わり、学生相談室や交流スペース hug の利用などを通して、対人コミュニケーションスキル能力の向上を図っていくことが、喫緊の課題といえるのではないだろうか。

回答例5については、いわゆる自分の意に沿うようにならないとクレームのような存在になってしまうことが示唆されるが、その背景にはその学生自身がこれまでの人間関係等でさまざまな苦労を経験し、他者との信頼関係を形成することに困難を感じたことが推察される。回答例4の考察にも述べているが、教職員との地道な関わりや学生相談室の利用などを通し、ほどよい対人関係の形成を支援していくことが重要であると考えられる。

次に、「その学生の課題や難しさには、どのような背景があると考えているか」ということについては、「家族関係 (28名・45.9%)」「身体的な問題 (5名・8.2%)」「発達障害 (14名・23.0%)」「わからない (15名・24.6%)」「その他 (精神的問題5名/経済的問題3名/知的能力3名/高校までの教育2名/環境変化, 男女関係, など)」となり、「家族関係」に続いて「わからない

い」という回答が多かった。家族関係や発達障害が学生対応の難しさに関連があると考えている教職員が多いことが分かった。

またその背景について自由記述の回答例の結果は以下表3のようになった。

表3 学生の課題や難しさの背景についてどのように捉えているかについての主だった自由記述回答例

①家族・相談相手 に関するもの

回答例1 家族は概ね温かいが本人を幼児のように扱うところがある。一方で就職については自立を求めており、つきはなされたと本人が感じることもあるのではないかと。
 回答例2 家族に相談しない。帰省しない。
 回答例3 誰にも相談できなかったようです。最終的に身体的問題となったと思われます。

②学習面に関するもの

回答例1 パターン化した学習テーマには、それなりに取り組めるが、学んだことを総合的に組み合わせ、考えることは難しいようだ。
 回答例2 LDか分からないが、本人の努力不足ではない。読み書きの困難があり、発達障害ではないかと考えた。
 回答例3 発達障害なのか、人間関係が築けない(未熟なのか)判断できない。

③他・複合

回答例1 本人の能力不足と、親がそれを理解できていない。本人も親との関係性が上手く築けていないようで本人に伝えたことが親に伝えられていない。
 回答例2 これまでの学習経験の不足と思われる。人とのかかわりも含めて。

主に、①のこれまでの家族関係に起因すると考えられるもの、②学習面・学力面がその背景にあるもの、③いろいろな要因が複合されたもの、の3つに分類できた。①については、家族関係にいて葛藤を抱えていたり、交流が少なかったりする背景が推察される。②については、基礎学力の不足はもちろんのこと、応用力の未発達、発達障害的要因などの背景が示唆される。③についてはおそらく割合としては最も多いもので、いろいろな要因が複合しているというのが、学生の抱える要因であろう。

次に「その学生の課題について、あなたから本人にはどのような対応を行ったか」という質問項目について、複数選択可による回答を求めた。「本人へ直接 (45名・73.8%)」「家族や友人への働きかけ (24名・39.3%)」

「他の教職員への相談・連携（31名・50.8%）」「学外の機関への相談・連携（6名・9.8%）」「その他（学生相談室と連携6名／保健センターとの連携）」となった。また自由記述により具体的な対応の内容についての解答を求めたところ次の表4のような結果となった。

表4 学生への対応についての主だった自由記述回答例

回答例1 レポートについては、細かく伝えたい内容を聞きながら説明するが、その場においても理解できていない。理解したことを自分の言葉で言うてもらうことで確認する。

回答例2 授業のレポートなどの課題への助言、および、会話を大切にするようにした。

回答例3 本人に対しては出来ているところを褒め、自信を持ってもらうように配慮した。本人の読み書きの苦手さについて他教員にも伝え、何か気付いたことがあれば報告してもらうこととした。

回答例の1～3はいずれも、具体的でわかりやすい指示や助言であり、また学生の自尊心を低下させないように配慮していることが示唆された。

次に、「この事例にあるような（困難を抱えた）学生への対応において、大学全体としてどうしていきべきか」という質問項目に対しての自由記述式による回答例は、表5の通りである。

表5 大学全体として、困難を抱えた学生にどう対応していきべきかということに関する自由記述の回答例

回答例1 主な担当教員を決め、関係教員が集まって対応を考え、その情報を他の教員が共有する。

回答例2 今後、このような学生が増えることが予想されるので、相談を受けることができる組織を公的に編成する。

回答例3 専門家や専門部署（保健センター、学生相談室、医師や心理士の資格のある教員）からの助言を求める。そのための連絡網やマニュアル作りをするべき。

回答例4 学生相談室に複数の常勤カウンセラーを設置するなど、対応を強化する。

回答例5 大学教育の中に地域のボランティア活動や、地域の子どもの交流体験など、社会経験が多くできるように支援し、それも教育として認めていけるようにする。

回答例6 お恥ずかしいですが、今のところ思い当たりません。ただ、各教員が手厚い個別対応もできるよう、全体的な仕事量を調整してほしいと思います。

まず、回答例1と2からは教職員間の連携や協力体制の確立、学内のシステム作りなどがあげられた。そして、回答例3と4は、主に学生相談室の充実をあげるものであり、専門家からのサポートを受けやすくする体制作りといえる。また、回答例5からは、教育カリキュラムの充実を図り社会経験を積ませることの重要性が、回答例6からは手厚い個別対応実施のために、全体の業務量の見直しについての意見であった。これらの主な4つの見解について、本学として、まず取り組めることは何かを考えていくことが重要であろう。

最後に、「この事例にあるような（困難を抱えた）学生への対応において、教職員個人としてどうしていきべきか」という質問項目に対しての自由記述式による回答例は、表6の通りである。

表6 教職員個人として、困難を抱えた学生にどう対応していきべきかということに関する自由記述の回答例

回答例1 学生にサービスする立場であるということをお忘れなさい。

回答例2 まず、「理解する」というのが前提になるのかと思っています。「知らないこと」で、学生に不利益が起こらないような対処が必要だと思います。

回答例3 学生本人の意向に任せてしまったという経験があるので、学生相談室との積極的な情報交換をすることが大切だと思う。

回答例4 対応する教職員が一人で抱えるのではなく上司やゼミもしくは講義担当の教員、学生相談室カウンセラーなどと必ず連携をとる。

回答例5 必要以上に介入しない。その学生の人生に責任を持ってないし、決めるのは本人にしないとこれから先が余計に不安。

回答例6 困難を抱える学生ばかりに目を向けるのではなく、意欲が高い学生、能力の高い学生への学習支援を心がける。

まず、回答例1と2からは、我々教職員のあるべき姿を振り返り、一人ひとりの学生を理解するという視点の重要性があげられた。回答例3と4からは、担当した教職員は一人で抱えるのではなく、他部署や他教職員と連携を築くことの大切さが示唆されよう。回答例5は、学生の主体性を損なうような対応はせず、おそらく、対応をしすぎないということを訴えたものである。回答例6からは、困難を抱えた学生だけではなく、むしろ意欲や能力の高い、そのほかの学生への対応をきちんとしていくことの重要性をうたったものであろう。

上記の結果を一つにまとめることは難しいが、大学全

入時代を、「いろいろな背景を抱える学生の大半が大学教育を享受できるようになった」と捉え、教職員は、授業料を納入している学生や保護者に対して、今まで以上に密に関わることが求められているといえよう。学生も一人ひとり異なるのであるから、その対応も当然学生の数だけ存在するともいえるのではないだろうか。

Ⅳ. まとめと今後の課題

1. まとめ

北翔大学教職員61名のアンケート調査のデータを分析、考察してきた。本調査結果からいえることとしては、教職員から見ると、困難を抱える学生の多くは、対人コミュニケーション能力に乏しいことが推察できる。不登校経験を有する学生、家族関係や友人関係に躓きのある学生などは、どうしても対人関係を形成することに困難が伴う。我々教職員は、自らを素材として差し出し、困難を抱える学生との人間関係の形成を講義やゼミなどで行っていくことが必要なのではないだろうか。

また、大変多忙な中、教職員は自分自身の業務をこなしながら、特に配慮や支援を要する学生の対応も行っていかなければならない。そのためには、これまでの業務の効率化を工夫するとともに、教職員も学生に働きかける（配慮する、支援する）という視点だけではなく、自らも学生とともに学び成長し、信頼されるよう努力する姿勢が求められると思われる。

本論文執筆者である我々4名は、皆、臨床心理士の資格を有している。問題や困難を抱えた人々にお会いするのが臨床心理士の業務の一つであるが、問題や困難というものは、一人の人間が生み出すものではないと考えている。むしろ、問題や困難は、人間と人間との関わり、人間と社会との関わりの結果生じるものであると考える。したがって、困難を抱えた学生に対して、我々教職員が、どういう自分であれば、学生の困難が少なくなり、主体的に大学生活を送ってもらえるのかを、真摯に考えていく必要があるのではないだろうか。

村瀬 (2008)⁵⁾は、「青年の心理的援助において求められるもの」において、「何か特化された技法を求めるといふより、基本的に、まだ未熟な要素が多分にあるクライアントであっても、人として遇すること、当事者の自尊心を大切にすること。その上で、その青年の問題点指摘にいたずらに急になるばかりでなく、潜在可能性の発見につとめる。こちらが前もって理論や技法の枠組みに添って、相手に出会うという姿勢よりも、柔軟に個別化して多面的な援助技法を工夫する。的確な見立てを行って、クライアントの試行錯誤をかなりの覚悟を持って見守り、待つ姿勢が望まれる」と述べている。

上記の村瀬の視点は、我々教職員への戒めともいえるのではないだろうか。さまざまな困難等を抱えた学生があらゆる意味で変わっていくためには、「この大学に入ってよかった」「この教職員や友人がいたから、自分も変わることができた」と思ってもらうことが大切であろう。教職員は自分自身の指導や対応を常に振り返り、個への配慮と集団への関わりについてバランスよく考えていくことが求められるのではないだろうか。

2. 今後の課題

アンケート協力者61名という対象数は、教職員総数を考えると、その一部でしかない。今後はより協力していただけるよう、さらにアンケート内容を吟味していきたい。

また、分析結果において、自由記述データを回答例として何点か提示したが、今後はKJ法などでより客観的に整理することを試みたい。なお、アンケート調査のみならず、インタビュー調査を実施し、教職員一人ひとりが何をどう考えているのか、より深いレベルまで語っていただけることで、本学の、ひいては困難を抱える大学生の支援方策の一助を提示できると思われる。

【付 記】

アンケート調査にご協力いただいた教職員の皆様に心より感謝申し上げます。

本研究は平成22年度北翔大学「北方圏学術情報センター研究費」の助成を受けて実施された。なお、本研究の一部は、平成20年度メンタルヘルス岡本記念財団の研究助成を受けたものである。

V. 文 献

- 1) 日本学生相談学会50周年記念誌編集委員会編 (2010) 学生相談ハンドブック, 学苑社
- 2) 斎藤清二他 (2010) 発達障害大学生支援への挑戦—ナラティブ・アプローチとナレッジ・マネジメント, 金剛出版
- 3) 独立行政法人日本学生支援機構 (2008) 平成20年度新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム事例集
- 4) 内田千代子 (2003) 大学における休・退学, 留年学生について—調査をもとに—, 大学と学生 2月号
- 5) 村瀬嘉代子 (2008) 青年の心理的援助において求められるもの, 『心理療法と生活事象』, 金剛出版
- 6) 田中康雄 (2008) 軽度発達障害—繋がりあって生きる, 金剛出版

[資料]

さまざまな困難を抱えた学生への支援を考えるためのアンケート調査

大学全入時代をはじめとした社会情勢の変化などにより、昨今の大学では、従来のやり方では十分に指導・援助が行えない困難を抱えた学生の増加が指摘されています。その「困難」には、従来言われていたうつ病などの精神疾患だけでなく、対人関係や情緒面での未熟さ・独特さ、知的能力のバランスの偏りなど、発達障害的な特徴までも含まれるようになってきていると思われます。

本アンケートではこのような困難を抱えた学生の現状と、彼ら／彼女らへの教職員の皆様のご対応のアイデアを整理し、今後の大学教育に求められる支援の在り方を考えることを目的としています。

なお本アンケートは、3月12日（木）開催予定の「多様な学生を支援するための勉強会」において、その分析結果の一部を報告し、議論の材料とさせていただく予定です。ご多忙の折、誠に恐縮ではございますが、なにとぞご協力のほど、よろしくお願いいたします。

福祉心理学科 飯田昭人・新川貴紀・川崎直樹

1. 職種について

ア) 教員 イ) 職員 ウ) その他

(ご所属の学科もしくは部署: _____)

2. 年齢について

ア) 20～29歳 イ) 30～39歳 ウ) 40～49歳 エ) 50～59歳
オ) 60～69歳 カ) 70～79歳 キ) 80歳以上

3. 性別について

ア) 女 イ) 男

4. 大学勤務年数について (※本学以外にも他大学にて勤務実績のある方はそれも加えて下さい)

ア) 1年未満 イ) 1年以上～3年未満 ウ) 3年以上～5年未満
エ) 5年以上～10年未満 オ) 10年以上～20年未満 カ) 20年以上

※後日、インタビュー調査にてより詳細にお話を伺わせていただける方を募集いたしております。ご協力いただける方は、お手数ですが下記にお名前をご記入お願いいたします。ぜひご協力をお願いいたします。

お名前:(_____)

質問1：本学学生に対する全体的印象

昨今、全体的な対応のみでは十分な指導・援助が行えないため、個人に合わせた配慮や支援が必要な学生が増えていると言われていています。この点について、全体的な印象をお聞かせ下さい。

① 実際に「個人に合わせた配慮や支援の必要がある学生」がどのくらい多くいるとお感じになりますか？

(いない ・ まれにいる ・ よくいる ・ 非常によくいる) [いずれかに○をお付けください]

② そのようにお感じになるのは、近年の学生のどのような点についてですか？下記の点について、全体的な印象でかまいませんので、あてはまるところに○をつけてください。

(上記①で、「いない」とお答えになった方も、近年の学生についての全体的印象としてご回答をお願いします。)

■ 講義・実習・ゼミの実施や内容の理解について (教員のみ)

	ない	まれにある	よくある	非常にある
1. 通常の前め方では講義等についていけない。	1	2	3	4
2. 自分でノートが取ることができない。	1	2	3	4
3. 一生懸命学業に取り組んでいる様子であるが成果があがらない。	1	2	3	4
4. 課題の提出期限が守れない。	1	2	3	4
5. 授業中、突然に的はずれな質問や奇妙な行動をとってしまう。	1	2	3	4
6. 聞く人、読む人がわかりやすいように考えを整理して話したり、文章にしたりすることできない。	1	2	3	4
7. その他()	1	2	3	4

■ 対人関係・情緒・進路面について(教員及び職員)

	ない	まれにある	よくある	非常にある
8. 敬語など、状況に即した言葉遣いができない。	1	2	3	4
9. 友人とトラブルを起こしてしまう。	1	2	3	4
10. 周囲から孤立しているようにみえる。	1	2	3	4
11. 物事がうまくいかないと動揺してパニックになる。	1	2	3	4
12. 自己主張が強く、自分の意見を変えることができない。	1	2	3	4
13. 極端に自信がなく、自分はダメな人間だと訴えている。	1	2	3	4
14. 進路に自分の能力や特性にあまりにそぐわない職種を希望する。	1	2	3	4
15. その他()	1	2	3	4

■ その他(近年の学生について、特に気になる点など、自由にご記入ください)

質問2：個別の事例について

次に、あなたがこれまで対応に苦慮した学生に対する個別の事例について教えてください。その中で、最も対応に配慮や工夫を要した(もしくは対応が難しかった)学生をお一人思い浮かべてください。

①その学生とは、どのような立場で関わることになりましたか。【いずれかに○をお付けください】

ゼミ担任・科目担当・窓口対応・その他()

②その学生の抱えていた課題や対応の難しさは、どのようなものでしたか。

③その学生の課題や難しさには、どのような背景があると考えられましたか。

【○をお付けください(複数可)】

家族関係・身体的な問題・発達障害・わからない

その他()

上で選択した内容について、具体的に教えてください。

④その学生の課題について、あなたから本人へは、どのような対応を行いましたか？

【○をお付けください(複数可)】

・本人へ直接 ・家族や友人への働きかけ ・他の教職員への相談・連携

・学外の機関への相談・連携

・その他()

上で選択した内容について、具体的に教えてください。

⑤ この事例にあるような学生への対応において、大学全体や各教員には、今後どのような点に留意する必要があるとお考えになりますか。もしくは、今後の課題はどのようなものとお考えになりますか。

■大学全体として、そのような学生にどう対応していくべきだとお考えですか。

- ・
- ・
- ・

■教職員個人として、そのような学生にどう対応していくべきだとお考えですか。

- ・
- ・
- ・

お忙しいところ、アンケートにご協力いただき、本当にありがとうございました。

このアンケートに対する、ご意見、ご要望などありましたら、お書きください、

○意見・感想等

なお、本アンケートは、平成20年度メンタルヘルス岡本記念財団の研究報告に活用させていただいた
と思っています。ご理解とご了承をいただきたく存じます。どうぞよろしく願いいたします。